意味の時間的次元から捉える過去―現在―未来

―組織の事例研究の理論的反省から―

東京大学大学院／日本学術振興会　樋口あゆみ

1. 目的

本報告の目的は、A. シュッツを端緒とする社会的諸領域における時間把握の研究、なかでもとりわけ組織における過去―現在―未来の把握について、事例研究と N. ルーマンの時間論を経由することで、その記述可能性を理論的・実証的に検討することにある。社会科学において、人々がどのように過去や現在、未来を把握するのかについては、組織の運営や過去の認識、さらには未来の予測に関わる重要な論点であるにもかかわらず、その重要性に比して多くなされてきたとは言えない。事例を通じて理論による記述力を示すことで、個別組織内の現象として描き出すだけに留まらず、他テーマへの応用可能性も視野に入れる。

2. 方法

方法としては理論的検討と実証的研究の記述からなる。前者ではシュッツによる社会的諸領域における時間把握を念頭に置きつつ、ルーマンの時間論を整理する。そのうえで組織のフィールドワーク調査での事例を用いて、過去―現在―未来は、実際にどのように当事者の経験として現われ、表現されるのかを記述的に示したい。事例として取り上げるのは、組織運営において規則を極力排し、成員間での意味の生成や共有を核としている、株式会社ほぼ日（以下「ほぼ日」）である。

3. 結果

ルーマンは、現在を可逆性と不可逆性の二重化された差異として整理している。たとえば過ぎ去ったものが不可逆だと認識された際に現在から過去への移行が把握され、未来的なものが現れはじめると認識される、とした。そうした認識は以下に見るように、週次・月次といった日本標示時に従って一律に流れる時間よりも、意味の共有や解釈を重視する組織に顕著に現れる。

「ほぼ日」では組織の運営の際に、個人の「なぜやりたいのか」という「動機」を重視する。社員はそれを巡って繰り返し問いなおされ、構築される意味によって、未来の企画成立可能性を探ると同時に、そうした「動機」が、終了したプロジェクトの振り返りの基点ともなる。そのとき社員にとって組織の過去は回顧することによって出現し、未来は現在判断すべき可能性の束として感覚される。組織内では、それが現在地点からの解釈であると半ば自覚されており、当事者によって「(この組織には）現在ばかりがある」と表現される感覚が表出している。

4. 結論

本研究は、たとえば「リスク」概念にも深く関わる。現在と未来の差異がその根底にはあり、それは均一に流れる時間を必ずしも意味しない。そうした例からも、シュッツが述べているように、時間といえども、形而上学的ではなく、社会学的な問いとして問われうることが分かる。

参考文献

Luhmann, Niklas, [1984] 1987, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp.

Schütz, Alfred, [1932] 1974, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: eine Einleitung in der verstehende Soziologie*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp.